通りねだる、そうすると、主人役の車夫の子が、コラ此あま何の事だ、お灸をすえるぞ、茲へ手を持ッて來い、猶ほ、ねだる、まだかと、頭を打つ眞似をする、猶ほ、ねだると、外へ、掴み出して仕舞ふ、お客が、お謝する、家内總立になて、お客が終ッた之れ子供業とは云ひながら、家庭の有樣を、實際見る心地して、怖ろしく感ぜられた。

記者と讀者

●三河國石川りよしう氏へ御答申し上げます。仰之通り女子高等師範學校に嫁母練習科と申すのがあります。本年一月から開始せられたので、學力は高等女學校或は師範學校女子部卒業の程度です。が、此には只今から入學することは出來ません。また此次に開始せられるか否かは、まだ分りません。

（一記者）

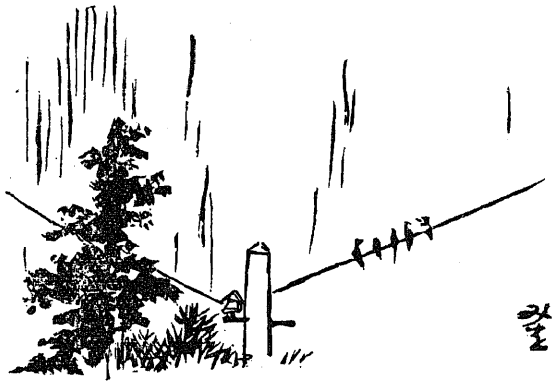
七月の天地

ま、か、生

開旦、惠の露にうるほひて、うれしげに生き〳〵と森も林も野も山も、我より先きに靜かに醒めて綠一入うるはし、稀に降る雨には勢殊に盛なり。

月の三日は半夏生、挿苗略ぼ終はる。炎威追々に逞しくなり晝過ぎはひせあつくなりぬ、此頃、

着物をも脱がず元氣よく溪の清水に冷水浴を始む
る頰白の親子あり、行儀よからぬやうなれど小鳥
の遊びなれば
致方なし。降
る雨に濡れ燕
は都遠き村外
れの電信線上
に親子兄弟姉
妹の一家の團
欒ならぬ一列
の休憩に樂む
で居る。



學生の休暇
は始まりぬ、なつかしき故郷に慕はしき父母同胞
を見舞はむ爲に、嬉しき聲は都下の彼方此方にひ
びく。獨り反哺の孝ありと呼ばるゝ烏のみは親し
き親子の長の訣別の期に近きてをちこちの森に林
にその鳴く聲やあはれなり。

夕立は腕白童の涙の如し、降つてみたり、歇ん
でみたり、その泣き出すや、英雄にも豪傑にも令
嬢にもお三にも宮殿にも茅屋にも乞食にも石地藏
にも、何の苦もなく頭から一氣呵成にあぶせかけ
一過して腹をいやせば素知らぬ顔の晴天にかはる
ところ、最も愛嬌あるものなり。

蜘蛛の巣は涼しきものなり夏木立、食だに足ら
ば網にすがりて憩むのみ、夕暮殊に面白し、獲物
の外に妨ぐるものあらば彼奮然として前後に試む
る柔軟體操の一節、前腕を平に動かせ、彼の得技
とするところ尙此外に數多あり、蚊にさゝれ戸を
さゝで見る夏の月は柄をさゝばよき團子なり、晝

の暑さは何の物かは。星の顔殊にきら〳〵となつかし。

二十日は土用の入なり、書籍、衣服、寶物等の曝涼は此頃より始まる、紙魚慌てゝ謝罪して逃げ隱る。

前庭の處々に、石竹、瞿麥、あぢさい、錦葵、夏菊、思ひ〳〵に色とり〴〵に咲き亂る。

後園に、石榴おかしげに赤き花を開き、柿の脊低き圓形の白き花見えて棗は高く橢圓の白き實を結ぶ。

清き流の溝端に、巵子香高く白き大形の花を開き、稻子叢に跳ねまはる。

蒼き海、白き帆。さては荒巖に激し碎けて巨濤の咆ゆる、白泡の跳ねる磯。數知れぬ眞砂の上にさゝやく如く戲れて女浪のよする濱。賤の苫屋の鹽燒く煙磯馴松の間より颺る。

那智の大瀑布と華嚴の瀑布、伊香保、箱根、鉛山、熱海、有馬などの溫泉、逗子、鎌倉、大磯、興津、稻毛、などの海水浴、富士、日光、榛名、妙義、高野の諸山。

バラルド孃の日本女子教育談

一記者

我がことに付いて、他人がどう考へて居るかといふことを知りたいと同じ樣に、我が國に付いて外國人がどう考へて居るかとは、吾々の日常知りたくてならぬ所で。殊に吾が女學界のことや、吾

が婦人社會の風俗等に付きて、外國人は一體どう觀察して居るかとりわけ外國婦人の眼に、どう映じて居るかは、吾々の最知りたい所で、併も之を知ることが最必要なことであらうと考へる。

そこで去る月の金曜日に或人の紹介で以て、バラルド孃を牛込の寓居に訪問した。孃は英國名門の系統で夙に彼の國高等の教育を受けられ、我が國に渡來されて以來既に八年、傳道に教育に孜々汲々として熱心に從事せられて居る、いつもながら、外國人の熱心には驚くの外はない。

一見した所、バラルド孃は、所謂瀟洒にして端麗、併も其人と語るや無限の愛を湛え、聞くに從つて洵々として述べられる、談は先づ宗教より進んだ。曰く

「日本人は、只今の處では極自由に働かうとして居ます、宗教上の規則も何も構はないで自由な教會を立てたがつて居る樣です。併し私の方では、此規則はどこまでも嚴重に守らんければならないのです、誰でも教師になれる、誰でも監督になれるといふ樣では、いけません、お國の此傾向は、まことに殘念と思ひます。夫から一體申しますと外國の宣教師の中でも亞米利加人は英吉利人と比べては學問がありませず、又一體に身分も低いです。英人はまづ大抵はオックスフォードとかケンブリッヂとかの大學を卒業して夫から參ります。今までは日本でも亞米利加の人々が多く來て傳道しましたから、いけないと思ひます。」

夫から話が一轉して教育のことに及んだ。余は孃が過ぎし八年間我國に居られて女子教育に付きて觀察せられた所の如何を尋ねた。孃は洪然一笑

曰く。

「女子教育ですか、ホ、、、隨分大きな問題ですね！。然し私考へます、日本では眞個に教育といふことが行はれて居ましようか？、教育、英語の Education といふ語の意義通りに行はれて居ましようか？、たゞ六かしい知識を教へ込むばかりが教育とは申されますまい。夫に歴史も教へます、地理も教へます算術も、物理も、化學も博物も教へます。併しエデュケーションと申すものは、眞實に人を仕立て上げる……人を慥らへて行くのでしよう。日本では隨分種々な知識を教へて居ますが、教育の意義が果してほんとうに理解せられて居るでしようかどうでしよう、と申しますは、日本では學校生徒の一組の數が大抵四十人位二十五人位ですが……四十人位で、もそつと餘計にありましよう。知識を授ける許りなら、夫で宜しいでしようが、夫では、とても一人々々に、ついて、ほんとうに人々の性質を見別けて、其性質に從つて教育して行くといふ樣なことは、とても出來ますまいじやありませんか。

英國では私立の學校 Private school などに在りましては、一組四五人位で出來てるのもあります、そう云ふ生徒……お嬢さんたちは大抵一人について一年に千圓も二千圓も教育にかけます。

女子大學校ですか、まーだめでしよう、私は大變殘念に思ひます、あんなに大勢入れて、夫で眞個の教育はとても、出來ますまい。

夫から、日本の婦人お嬢さんたちは、一體何の爲に教育を受けるかと申しますと、大抵は卒業して、いい所へお嫁に行く支度なのです、日本のお

嬢さんたちは、たゞいい所へお嫁に行くのが目的で、夫より他には何の目的もない、教育を受けて自分の身を修め、品格を高め樣などの考を以てやる人は一人も居ない樣です。今少し日本の婦人も見解を廣く持たんければなりますまい。尤も英國あたりでは、元來、根本的に考が違つて居ます、女學校を卒業致しても、裁縫や料理などはできません勿論中等以上、私どもの仲間に在りましても自分で裁縫の出來る人はありません、料理の出來る人もないです、中等以下でも大抵下婢をおいてやらせます、料理や裁縫などは卒業してから、極く〻篤志な人がやるのです。

一體、國の事情が違ひますからでもありますが、學問をするに、お嫁に行く爲だといふ考でする人はない樣です。日本では、例令ば、九つ位の女兒にしても、ぢき、いい所へお嫁に行くといふことをいいます。

夫から先生方、女學校の先生方にしましても、一體に日本では、餘り忙がし過ぎるじやありませんか、あれではとてもご自分がたの脩養だの勉强だのと申すことは出來ますまい、どうか先生方も今少しご自分方の脩養の爲に時間を得る樣にありたいですな。

女服の改良ですか……

まーこれも六かしい問題ですねー、併し私は日本の婦人が洋服を着ることはいけないと思ひます、何故かと申しますと、西洋の婦人の服は、一年一年に變ります、昨年のは、もうことし着ることが出來ません。それですから大變に費用がかゝります、勿論私は、いけないと思ひますが、どう

も致し方がありません、私の今着て居ますのも、昨年の服ですから西洋人などには……お國の人には分りますまいが……見つともなとい思ひます。

お國の、まー、女官さんたちのお服でも、西洋人から見るとお可笑です。夫は御殿の服を造る仕立屋さんは私共の服を仕立てません、私共西洋人のを仕立てる洋服屋は　年々の流行を私共から教へますから宜しいですが、御殿のを造る仕立屋は誰も教へる人がないのですから知らないで妙なものを造つて居るんです。

夫から帽子なども要りますまい、何故かと仰るんですか……夫は日本では今迄冠らずに濟んできましたのですから、今から新に冠り始める必要がないでしょう、夫に花だの裝飾だの隨分高いんでありますし、又日本の婦人の髪の毛が隨分澤山ありまして甘く帽子がはまりませんのです。ですから、洋服は、親御さんたちに氣の毒です、まー、どこの國にもない新らしい便利なのを考へ出すより外ありますまい。

對話はこれで濟んだのである、吾人は外國婦人と語る時に常に感じられるのは、其見識が、如何にも高いのと、談話が頗多方的に興味があるのと、思想がチャンと判然としてることなどであるが、バラルト孃の談話に於ても殊にそう感じられた。余は孃が多忙なる時間を以て特に余の爲めに會談せられたる厚意に向つて深く多謝するのである。

一聲は月が鳴いたかほとゝぎす

印度土人の家庭生活（承前）

Y・　I・

夫で印度人の結婚のことに付て尙一二言申し上て見ませう。ズット大昔に遡つて考へて見ますと印度の制度は決して今日のやうに婦人をひどく壓制する趣旨ではなかつたに相違はありませぬ、當時は宗敎が印度の社會制度の基礎であつて、結婚と家庭の神聖とは其制度中の高位をしめ、男女ともに或る規定によつて、自分達の快樂のためと云ふよりも、寧ろいろ〳〵の神樣を悅ばしむるやうに、暮さければならなかつたのでございます。そうですから小供の時に結婚させるやうなことは、確かになかつたのです、又寡婦とても、今日のやうに強て世の快樂を全く廢して、辛く苦き生活をすることを要求せられなかつたのでございます。

印度の婦人は、一般に其良人を深く愛しますから結婚して多年間、ともに樂しく暮しましたあとで、寡婦となつて殘されるやうな場合には、宗敎上からして丸つきり情慾を棄ること、ひどく克己することなどは甘じて受けます、なぜかと申しますと、自分達がこの世で凡ての快樂をすてゝ、苦しい生活をするのは、その親愛する良人を未來で幸福にしてやることになるので、又ゆく〳〵は自分も共に其の幸福に預るのであると信ずるからです。良人の死去するときに、未亡人が殉死するのもつまり此迷信の增長したのでございます。なぜかと申しますに良人の屍を火葬にする爲めに堆く積んである薪木の上で、その未亡人が燒死するのは、その良人と自分とに直接に天の祝福があるばかりでなく、其先祖に約束された罪の赦し

と天國に入ることを、四十二代ののちまでも許されるといふことなのでございます。

少しく年増の寡婦は大層敬はれますが、稚き寡婦になりますと、實に印度の家庭に於ける一つの汚點となる位なのです、決して當人がひとり悲歎に沈むばかりでなく、兩親までもこの不運な娘のために、堪へられない憂慮に陷るのです。良人が死去した後に其家に留まつて居ることは、一層堪へがたいことであらうといふので、實家に引とるやうに取計ふことも毎度あることで、この悲運を忍びやすくするために、種々樣々と手をつくすのでございますが、宗教上の儀式になつてゐる階級的風習ばかりは、如何とも免れることは出來ないのです。

若でく幼き時に寡婦となる場合には、他の普通の女兒とあまりかはらない生活をさせますけれども、これが十四五歳になりますと、可愛相にまづ頭の髮をそつて仕舞いすべての粧飾も廢して極僅の質素な衣服を身に纏ふやうになるのですが、そればかりでなくどんな種類の小集にも出席することは出來ないので、自分の妹の婚禮であつても決して出席いたさないのでございます、夫でた家にばかり居て掃除のことだの、料理のことだの、何くれとなく立ち働きますのと、其他にたびたび斷食をして祈禱をするばかりです。

先かやうにして老先のながい餘命をすごさなければならぬのです、けれども爰に一つの家族的愛情の深厚なる一端とでもいふやうなものがあつてこの年わかき寡婦は實家では自分の位置を失はないのでございます。若しこの寡婦が時經て齊家の

道に熟練いたしますならば（寡婦のためにはこの一事のほか此世の中に何の興味も持ないのです）母親あるひは兩親が死去の後には、この寡婦がその兄弟の家の家政を司どる主婦となれるかも知ませぬ、これは皆さまがさぞ不審に思召すでしやうこの寡婦の兄なり弟なりは、ぜひとも妻を娶らなければならないのに、どうして左樣なことができるかと、おうたがひになるに相違ありませぬ、併し寡婦の方が其妻君よりも年長であるとか、殊にその家の相續人が寡婦の弟である場合には、その姉なる寡婦は嫁の上位に立つて家政を執る權利があるのでございます。

只今私の心に浮ぶのは、印度で有力な一人の紳士であつて又有名な改革家でありますが、此人の細君は教育もあり、又英語なども巧に話せる方であつて印度の社會生活の改革について、良人が企つることに深い同情をもつて、熱心に奮勵して良人を助けて居られますが、この夫人は家政を治めないで、良人の姉にあたる一人の寡婦が代つて家政をいたされますが、この寡婦と申すのは至て舊守で、從來の宗教を堅く信じて居られます方で、大變に不運な人であるといふので、皆がたいそう親切に待遇し、その意のまゝに任せてあります。

過し多年間印度の改革者の第一の目的となつて居るのは、このいとけなき寡婦の生活を、ひどく苦しめる所のいろ〳〵なわるい風習を改良するといふことでしたが、今までの所では從來の宗教を固く信仰して居る家族では進歩だの改革だのいふことは、到底行はれないのです。印度の宗教と僧侶とは、このやうな改革にはどこまでも反對いた

しますから從つて婦人達も、そういふ不敬な異端の建議には、飽までも抵抗するのでございます。

女監を觀る

澪生

去る或年の春、公の手續を經て、熱誠なる某典獄が某縣師範學校女生徒に女監の參觀を計されし時の心覺えなり。

午後一時うちつれられて發す、程なく黑塗の大門を越え門衞に會釋して入る、受付の案内にて直ちに樓上の應接所に伴はる、某々の兩看守長上り來りて接待せらる、暫くありて、曲獄はいと質素なる略服にて出で來り一應の挨拶終りて、穩に一同に對して、

當監獄に於ける本日の現在囚徒は男女總計七百六十七名にして、内男囚は六百七十八名女囚は八十九名なり、我邦に於ける最近の統計の示すところに從へば女子の犯罪者は男子の犯罪者の數の約十分の一なるに、我縣下には此平均數より女子の犯罪者の多きを見る、余は消極的の社會改良者として積極的の社會改良者たる諸淑の盡力を望む

との意味の演說せられ、今日は女監及び幼年監並に炊事場に就きて十分參觀せられたし、自分は據なき公務の爲に案内し難きにより兩看守長に依托し置きたれば何なりとも不分明のところは兩氏に尋ねられたしといと懇に言ひのこして退かれぬ。

一行は乃ち兩看守長に伴はれて、いよ〳〵監房内の參觀に赴きぬ、恐しげなる第二の黑門は異樣なる音しつゝ開かれて、我等は入る、一種の凄みある空氣は我面にふれわたりぬ、男監と女監との並びの柵は高く聳えて狹からぬ通路をも小溝の中

を行く思ひしながら「女監」と記せる第三の黑門に至る開かれむことを合圖するにや看守長は門に裝置せる札付の紐を引く、門は忽ち內側に開かれて其處に立てる袴着けたる四十近き一人の女の看守丁寧に默禮しぬ、此處を踏み入ればまた第四の門あり、この門より內は平素は殆んど男子の出入することなしといふ、門は漸次に小さくなりて境域はます〳〵せばまる、闘をこゆれば此處ぞ早や此世の地獄なるいとも〳〵ものすごくすざましき處なりける。

房內の囚徒等は今は工場に出役中なれば、われは看守長の示さるゝがまゝにうかゞふに、各房は一間に二間の板間にして奧の一隅は便用の所なり房の中央にしまりよく疊みたる薄蒲團二枚の上に枕を置き、二つの小桶と雜巾とを其積み重ねの前の板間に並べ置けり、整頓の正しきと板間の清潔なるとは共に我には意外の感ありき、されど此感は房の前後に於ける幅三尺の鐵窓と戸口にかゝれる錠とのいかめしさにうち消されたるのみならず、囚徒の罪名及び住所、族籍、生年月、番號を記せる戸側の標札には呆氣にとられて言葉も出でざりき、曰く竊盜十四犯、曰く强盜幾犯、曰く放火犯、曰く謀殺、曰く故殺、曰く强盜殺人犯と、我は幾度となく「如何にもと」疑ひて其姓名を檢せしに確かに皆女性に相違なかりき。

重罪犯の房に次ぎて輕罪犯の房あり、竊盜犯のもの多し、監房の構造は罪の輕重によりて差別なく何れも一房毎に三四名宛囚れ置かるゝものと標札の數によりて推察す。

十數の監房を過ぎて囚徒等が毎旦暮工場に出入

する時の身體の檢査所に至る、狹き廊下の中ほどに板間より三尺餘の高さに横べたる二本の門あり、彼囚徒等は毎朝必ず衣を脱して此方に吊し置き、身に一片の被なくして此二本の門を跨ぎ越して彼方にて更に他の工場着用の赤衣を着して終日工場にて働き、夕に監房に歸るや又しかなすとかや、斯く朝夕の檢査をなすには謂はれあることなるべし。世の常の人のならば聞くだにいまはしくはづかしきものならむを彼等はそも何とも感ぜざるか。

行く〳〵彼等の働き居る工場に入らむとす、女の看守「禮」の令をかく、彼等は等しく手ををさめてうつむきぬ。終りて復々業にかゝりぬ。われは當時既に異樣の感慨にうたれつゝありしかども、なほ徐ろに彼等を觀察しぬ、場の西の方には機によりて布織れる者十數人、東の一方にて足袋縫をなし居るもの二十人ばかり、其南の方には絹繰、絲つなぎ等くさぐさの業を執れるもの十人あまりあり老も若きも強きも弱きも共にそれ〳〵定められたる課業を爲し終へざらむとを只管恐るゝもの、如く警咳するものもなくいと忙はし。而して特に我が神經を刺戟せしものは、其突き上げたる若くは押付けたるが如き鼻、臂敷の蒲團の如く厚き、一厘煎餅の如く薄き唇、備前燒の花瓶の提梁の如く、橙の樹に生えたる木耳の如き耳、其耳の邊まで裂けたらむばかりの口のあるは開放したる、あるは恐しく締りたる等、總じて特別製の道具を以てよそはれたる蒟蒻塊の如く、佛掌薯の如き、梅干の如き熟柿の如きさては四角六角三角八角などの雜多異樣の面貌に、かて〳〵加へて實無しの栗

の長き毬彙の如き蓬生の如き燭の如きくさ〴〵の頭髪はいとど悽愴を添へて何れも不平とも悲哀とも遺憾とも辨別し難き朧げなる其眼をば其熊手の如き鐵火箸の如き業操れる手もとに注ぎ居たる彼等の相貌なりき。われは唯默し居るのみなりき。工場の東の壁に西面せる佛壇あり、内に阿彌陀如來の一軸をかけたり、例の看守長恭しく閼戸を排して囚徒の面前に於ておごそかに一禮す、われも場所柄のことなれば輕からず默禮す。聞けば彼囚徒等は此如來の前に於て時々教誨師の教を受けしめらるゝと、思ふに餓鬼の如き彼等は幾度か人間に生れ變りて遂に能く菩薩の域に立ち至るを得べきか。

（未完）

時言　時言子

夏は來れり。

酷熱燃ゆるが如く炎暑燒くが如しなど云へば、夏といふもの、如何にも一年中の惡まれ者の樣なり。腸加答兒、赤痢、虎刺拉等、最怖るべき傳染病の流行季などいへば、夏といふもの、さながら一年中の罪人にも似たるか。

併れども、凜烈膚を刺せし朔風は、今は極樂の餘り風となりて絶えず汚熱を拂ひて清涼を傳へ來るあるに、まして綠樹の陰清流の邊の遊快は、如何の時季に於て見るを得べき。吾は四季中最夏を愛す。況んや恐るべき傳染病の流行は、反つて吾人の不衞生を誡むる夏の訓誡の賜なり。誰か一年中最愛すべく最恩深き夏を稱して惡れ者の

如く罪人の如しといふか。

夏の愛すべきは、たゞ之のみにあらず。一家擧つて海の邊山の蔭に居を遷し、暫し世を忘れてこゝに自然を友とす。子女教養の好機會此の如きもの四季中又何れにか求むるを得ん。千丈萬丈の紅塵を浴びつゝ日夕營々として書物と首引なせし學生も、殺風景極まる下宿寄宿の住居を脱して、こゝに再たび麗はしき鄕里の山水に接し、涌くが如き同情の家庭に歸省す。夏あればこそ。

夏なからんか、吾人の腦は大方は、都の塵にまみれて自然を忘るゝなるべく、殺風景の交際に慣れたる吾人の心情は、遂に家庭に於ける眞個掬すべき同情に溫めらるゝ期を失なふに至らん。

勞れたる體力を恢復し、倦める腦髓を新にし、冷えたる同情を溫むることを得る、まことに夏の賜なるかな。今やこの愛すべき夏は、來れり。鄕里の父母兄姉は更に時ならぬ春を迎へし心地にて、愛すべき子女弟妹を待てり。山も待てり水も待てり。手植えし桐も、手飼ひし犬も、嗚呼凡べてが待てり。

希くは山紫水明の域に逍遙し、滿室の同情に浴し、かくて秋高く氣淸かなる時に於て、健全なる身體と新鮮なる精神とを以て再學窓の下に諸君と相見えんかな。

八十八

師弟の道

古の士、學をなすや單に身を修め心を正しくするに在りき。今の人學をなすや多く資格を得糊口の資に供せんがためなり。古の士は、師の人となりを敬慕し其品性の感化薰陶を受けんがために、

入つて弟子の禮を取れりき、今の人は、先づ學校を卒へて而して後得らるべき資格を的にして、校門に入る、教師の學識品性問ふ所にあらざるなり。古の師も弟子に臨むや、身を以て之を卒ゐ親權を以て之に接す。富貴に阿らず、權門に媚びず、卓然として一世に超絶して、自家の所信を行ひ一代の尊信悉く一身に集まるなり。此の如くして、師と弟と相待つて所謂師道大に振へりき。今の教員に至りては吾遂に之をいふに忍びず、只言ひ得る所此の如きのみ、一官吏として其職を行ふ、故に浮沈常なき官海の風波に身を委す、是を以つて職去つて身究す、卽師道を行ふを力むるよりは主として官海游泳の術を行はざるべからず。師と弟と相携へて此處に師道頽敗す。

今の人口を開けば、卽師道の興らざる弟子の禮衰ふるを歎ず、是に於て修身に、唱歌に、日々營々として其恢復を圖る、併も其依つて來る所を考ふれば、一篇の歌一場の談の遂に能く修養し得る所にあらざるものたるを知らん。

宗教界の活動

炎熱の夏來りたりとて、何所も彼所も昏々として隋眠を貪れる時に當りて、獨り目覺ましき活動を顯せるは宗教界なり。基督教は先月中大擧傳道と稱して、市内の教會連合して殆んど連夜の大說教を試み、成績すこぶる見るべきものあり、是に於て東亞佛教會は、更に錦輝館に於て、大に演說會を開いて、耶蘇教、天理教等の反對運動に着手せり。右に付きて例の千崎如幻氏、語りて曰く。

「どうも基督教徒の熱心には驚きます、あの熱心で以てやれば、成効が見られずには居れません、佛教徒などとても叶ひません、東亞佛教會など駄目です、まるで他がやるから此方もやるといふ風なので、あんな演說會や托鉢などよりも、もそつと外になすべき必要の事業が、いくらもあるではありませんか。此間も私は教會へ行つて聞きましたが、彼等の熱心な說教には私などでもありがたくなつて來て、ざんげしたくなつてきましたからなー。云々。

今や穢風地を拂ひ、道心日に幽なる時に際し、基督教の壯擧まとに機を得たるものといふべし。

時論抄錄

抄錄子

●吾等の良友　書籍は吾等に智識の倉庫を供へ、吾等の見界を擴くし、吾等をして下等の快樂を去りて高尙の趣味を與ふる眞の良友なれば、獨り女學生といはず既に家庭を作れる主婦に取りても常に讀書の習慣を養はざるべからず。西洋の婦人就中英國の婦人は最讀書を好む。其原因は大略下の三に歸すべし。(一)幼時よりの習慣、(二)交際上の必要。(三)廣大普遍の趣味之なり。(をんな第五號　安井哲子)

●舅姑に告ぐ　女子教育の進步發達を期すると共に此新教育を受けし女子を容るべき舊家庭を改良せざるべからず、然らずば今日過渡の時代には幾多不遇の女子を作り、或は一家の困難もこれより生ずる事あらん、世事に經驗ある舅姑は何につけ、粗忽もあるまじきが時々は時世に會はぬ考もあるべし、舅姑は常に昔と今は萬事相違せりと覺

悟すべし、世事に實驗ある母と新教育を受けて文明の智識を有する嫁を相談相手にして一家の事を慮らば家道益々繁盛し一家和合すべし、（裏錦第百四號）

●一家の經濟に於ける主婦の覺悟　我國の現況を見るに都會の人士財力をかへり見ず、奢侈を極め流行を逐ふ、此風習漸次山村僻地にまで及ぶ、今や經濟界不振の悲境に陷り。銀行の解散、會社の破產瀕々として相繼ぐに到る、こは獨り一國の上のみにあらず、小にしては一家、一人の上に及ぶものなり、其の原因は世の流行を逐ひ奢侈を競ふによるなり、故に一家の經濟を主どる主婦は確固たる精神を以て此の風潮に反抗し堅く勤儉を守らざるべからず（家庭　第六號）

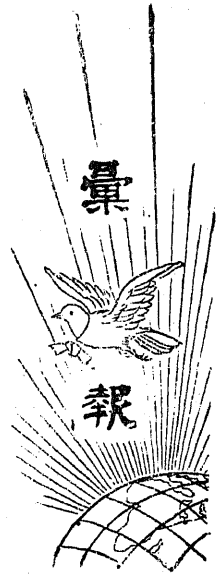
●社會改良と婦人の勢力　日本婦人の勢力振はずとは、一般の定論なれど、實際其潛勢力偉大なる物故、社會の改良は婦人によりて行はるべきなり、其第一着歩として、宴席集會などにはいまはしき下等女子の跡を絶たしめ、夫人令孃を伴ひて出づる事にせば、吾も人も高尚なる快樂を得るに到らん、家に在つても外にありても。樂を共にして、父子夫妻秘密なく隔意なく、常に和氣藹々たる家庭を作るに到るべし。

●禮法　禮法の形式よりも精神の重んず可きはもとよりなれど、規則的の形式は自然精神をも規則的ならしめ、粗暴なる擧動は、常に粗暴なる心に伴ふものなる事を考ふれば形式とても猥に輕んずべからず。（上以二件婦女新聞　第五拾六、七號）

●日本人の體育に就て　婦人の幅廣き帶は、內臟を壓迫して害あり、又衣服の肺臟の發育を害し、

上肢の運動を妨ぐ故に胸部の仕立方を改良せざるべからず、コハゼがけにするもよし、小兒は附紐を下に着くべし、袴を着しても、其下普通の服にては下肢の運動自由ならず、こも亦工夫を要すべきものなり、また米を常食とせる日本人は含炭物多きに過ぎ、含窒物、不足勝なれば米よりも麥を食する方宜し、若し米を食するとしても、なるべく其分量を少くして、含窒物の不足は魚獸の肉にて補ふべし。(日本婦人　第十九號　高木兼寛君)

●慈善につきて　眞正の慈善たるや否やを極めずして輕々しく隱ずるは却りて不慈善となるやも計られず、深く思はざる可からず、又つとめて己が慈善事業に從事することを世人に披露せんとする僞善は言語同斷の擧動なり(女鑑　第二百三十號)



●女子高等師範學校附屬高等女學校生徒演習會。先月二十六日水曜日午後一時より同校體操場に於て開會、說話、音樂、席上揮毫・作文、朗讀、英語對話等の演習ありたりとのことなり。

●各學校暑中休暇　女子高等師範學校は愈來る十一日より、本校附屬校園とも暑中休暇に至るべく▲女子大學校は本月一日より授業半日とし同十一日より休暇となるべく▲東京府第一高等女學校は先月二十日より既に半日授業となせしが、來る二十日より夫々休暇となるべしとなり。